

潮見山古墳群

— ため池等整備事業 葉佐地区に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2 0 0 3

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

しお み やま
潮見山古墳群

— ため池等整備事業 葉佐地区に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



2003

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版



調査地（南より）

序

松山市の所在する松山平野は、西を瀬戸内海の斎灘・伊予灘に面した県下最大の沖積平野です。

松山平野は、古墳時代後期に中小の前方後円墳が多く築かれる地域としても知られており、特に松山平野の内陸部、古代久米郡を中心とした範囲に集中して築かれることが判明しています。

今回調査を実施した潮見山古墳群は、旧久米郡域の東端に位置する古墳時代後期から終末にかけての群集墳で、古墳群の至近には古墳時代後期の前方後円墳「葉佐池古墳」が鎮座しています。

ほとんど全壊状態の古墳に対する調査となりましたが、今回実施された調査によって、わずかではありますが葉佐池古墳や播磨塚天神山古墳に後続する時代の情報を得ることができました。特に、17号墳周辺にて採集した須恵器片の中に、周辺の窯址で焼成された可能性の高いものが含まれることは大いに注目されます。

このような成果をあげることができたのも、愛媛県松山地方局はじめ関係者各位の皆様への埋蔵文化財に対する深いご理解と御協力のたまものであり、厚く御礼を申し上げます。

松山市内には、我々の知らない貴重な遺跡がまだまだ多くのこされていると考えられます。埋蔵文化財の保護ならびに発掘調査に対する一層のご理解と御協力の程よろしくお願い申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の糧となり、ひいては文化財保護・教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成15年3月7日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長 中村 時 広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成14年1月～平成14年5月に松山市北梅本町において、愛媛県松山地方局産業経済部第二土地改良課の「ため池等整備事業 葉佐地区 ため池改修」に伴い実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に使用した方位は磁北である。
3. 遺構の実測は、発掘担当調査員および栗林和孝、保島秀幸、岡崎政信が担当し、作図・製図は調査員及び丹生谷道代、築山知子、矢野久子、多知川富美子が担当した。
4. 遺物の接合・復元及び実測・製図作業は、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子が担当した。
5. 遺構の写真は、調査員及び大西朋子が行い、遺物撮影は大西朋子が行った。
6. 小野谷駄馬窯址出土資料に関しては、西尾幸則氏、栗田正芳氏、山之内志郎氏に御教授いただいた。
7. 本書に関わる遺物及び記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 本書の執筆・編集は、吉岡和哉が行った。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

- 1. 調査に至る経緯 1
- 2. 調査・刊行組織 1～2

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

- 1. 遺跡の位置 4
- 2. 環境 4

第Ⅲ章 試掘調査

- 1. 試掘調査の経過 6
- 2. 試掘調査の結果 6～11

第Ⅳ章 本格調査

- 1. 本格調査の経過 12
- 2. 本格調査の結果 12～22
 - (1) 墳丘の調査
 - (2) 石室の調査

第Ⅴ章 出土遺物 24～26

第Ⅵ章 調査の成果と課題 26

挿図目次

- 第1図 調査地周辺の遺跡 3
- 第2図 調査地位置図 5
- 第3図 「西堤・南堤改修」予定部分トレンチ位置図 7
- 第4図 「北堤改修」予定部分周辺石室分布図 8
- 第5図 試掘調査トレンチ土層断面図 9・10
- 第6図 調査前地形測量図 13・14
- 第7図 調査後地形測量図 15・16
- 第8図 調査前15号墳主体部測量図 17

第9図	15号墳主体部測量図	18
第10図	調査前16号墳主体部測量図	19・20
第11図	16号墳主体部測量図	21
第12図	調査区壁面土層断面測量図	23
第13図	出土遺物実測図	25

写真図版

巻頭図版 調査地（南より）

図版1 試掘調査前・南堤改修予定部分（西より） 試掘調査前・A～B地点（南東より）
試掘T1完掘状況（北西より）

図版2 試掘A地点精査状況（南東より） 試掘B地点精査状況（南東より）
試掘T2完掘状況（西より）

図版3 試掘T3完掘状況（西より） 15号墳主体部本格調査前（南より）
16号墳主体部本格調査前（東より）

図版4 調査地遠景（北東より）
調査地全景（北より）

図版5 調査地完掘状況（東より）
17号墳調査後現況（北より）

図版6 15号墳主体部追葬時埋葬面（東より）
15号墳主体部初葬時埋葬面（南より）

図版7 16号墳検出状況（北東より）
16号墳主体部完掘状況（東より）

図版8 調査地出土遺物 （参考資料：小野谷駄馬窯址採集須恵器・甕）

第I章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成13(2001)年10月5日、愛媛県松山地方局産業経済部第二土地改良課（以下、松山地方局）より、当地における埋蔵文化財の試掘・確認調査の申請が松山市教育委員会文化財課（以下、松山市教育委員会）に提出された。

申請は、「ため池等整備事業 葉佐地区 ため池改修」に伴うもので、申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.105潮見山古墳群（愛宕山古墳①・山越古墳②）」内に所在する。

申請地は、近年‘未盗掘の古墳’として紙上をにぎわした6世紀中頃の前方後円墳、“葉佐池古墳”の北側に位置する。また申請地周辺の丘陵上には、葉佐池古墳以外にも数多の古墳が分布することが知られており、そのうち潮見山古墳群・明神ヶ鼻古墳群などの中には、開口する石室を実見することの可能な古墳も存在する。さらに調査地周辺は、6世紀後半から8世紀後半にかけての須恵器の窯址が集中して分布することで知られる地域でもあり、調査地の東側に広がる潮見山の麓には「潮見山南窯址」の存在が確認されている。

以上のような経緯のもとに、特に丘陵裾部に遺存すると考えられる古墳及び古窯址の確認を目的に、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターと記す）は、平成13(2001)年12月6日より平成14(2002)年1月31日にかけて試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、古墳の主体部と思われる石組及びそれに伴う古墳時代の遺物（須恵器）を確認し、事前の発掘調査が必要であると判断された。

これらの結果を受け、松山市教育委員会・埋蔵文化財センターと松山地方局は遺跡の取り扱いについて協議を行い、ため池の改修工事によって破壊される可能性の高い古墳に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、葉佐池古墳に後続すると考えられる群集墳の構造解明を主目的とし、松山市教育委員会の指導のもと埋蔵文化財センターが主体となり本格調査を実施した。

2. 調査・刊行組織

本調査の、調査・刊行組織は以下の通りである。

調査地 松山市北梅本町甲2445、2446、2447の各々一部

調査期間 (試掘) 平成13年12月6日～平成14年1月31日
(本格) 平成14年1月19日～平成14年5月11日

調査面積 (試掘) 10,028 m²
(本格) 530 m²

調査委託 愛媛県松山地方局産業経済部第二土地改良課

調査担当 栗田茂敏・吉岡和哉

はじめに

〔調査組織〕（平成14年3月29日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢 陽三
事務局	局長	大西 正氣
	次長	川口 岸雄
	企画官	一色 巧
文化財課	課長	馬場 洋
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	二宮 正昌
	事務局次長	江戸 孝
	事務局次長	森 和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川 隆
	専門監	野本 力
	調査係長	西尾 幸則
	調査主任	栗田 正芳（文化財課職員）
	調査員	栗田 茂敏・吉岡 和哉・大西 朋子

〔刊行組織〕（平成15年3月7日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢 陽三
事務局	局長	武井 正浩
	企画官	川口 岸雄
	企画官	石丸 修
文化財課	課長	馬場 洋
	主幹	八木 方人
	副主幹	田城 武志
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	三宅 泰生
	事務局次長	菅 嘉見
	事務局次長	森 和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川 隆
	専門監	野本 力
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	調査員	栗田 茂敏・吉岡 和哉・大西 朋子



第1図 調査地周辺の遺跡 (S = 1 : 10,000)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

潮見山古墳群15・16・17号墳は、愛媛県松山市北梅本町甲2445、2446、2447の各々一部に所在する。松山市は愛媛県のほぼ中央部、瀬戸内海に面して開けた県内最大の沖積平野「松山平野」の北部に位置する地方都市で、遺跡は松山市の東端「小野地区」に位置する。

遺跡は、潮見山丘陵の西側に散在する小丘陵のひとつ（標高120.23m、西側水田との比高差約18mを測る）の中腹東斜面に立地し、標高109～112mを測る。（第1図・第2図）

2. 環 境

潮見山古墳群の所在する地域は、古代久米郡域の東端付近にあたと考えられている地域である。また、これまでに調査地の周辺では、前方後円墳あるいは窯址などの古墳時代後期から古代に属する主要遺跡が多く確認されている。

本項においては、現在までに調査地の周辺に位置することが確認されている古墳時代および古代の主要遺跡について簡単に述べる。

古墳時代の主要遺跡としては、特に2基の前方後円墳の存在が指摘可能で、調査地の至近に位置する葉佐池古墳および、調査地の南方約1.6kmに位置する播磨塚天神山古墳の存在が広く知られる。

葉佐池古墳は、古墳時代後期に築造された全長約60mの前方後円墳である。発見された4基の石室のうち2基が未盗掘で、副葬品・木棺などが当時のままの状態に遺されていた。古墳時代の葬送儀礼を復元する上で全国的にも第一級の資料を供する遺跡である。

播磨塚天神山古墳は、古墳時代後期初頭に築造された全長32.5mの前方後円墳で、墳丘上に朝顔形を含む円筒埴輪および形象埴輪を樹立していたことが確認されている。また、主体部である横穴式石室からの出土品として、銀製空玉・二連の耳環・刀子飾金具・剣菱形杏葉など数々の金銅製品が知られる。

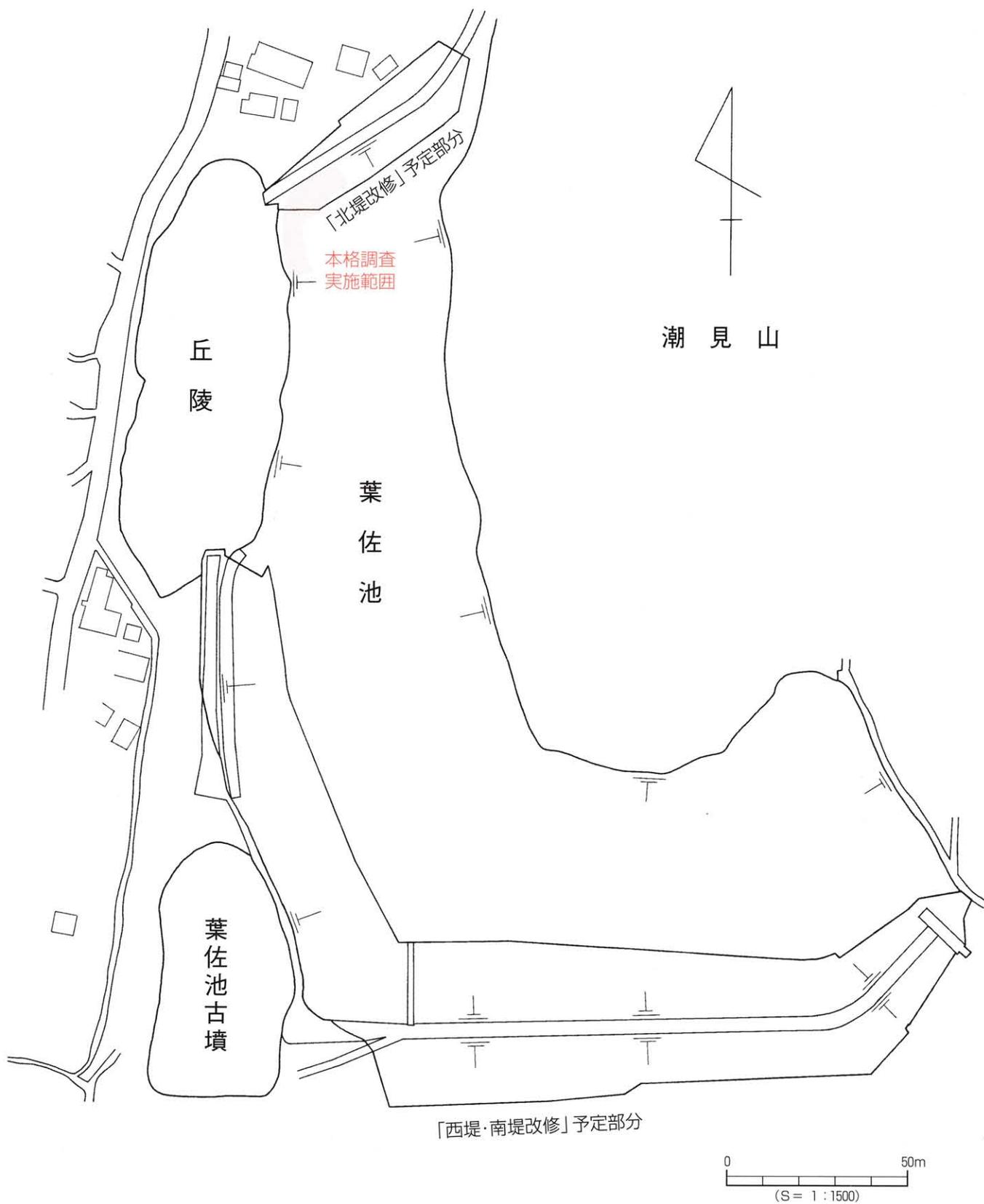
古代の主要遺跡としては、調査地周辺に広く分布する須恵器を焼成した窯址の存在が指摘できる。当地域は松山平野東部古窯址群と呼称される窯址群の分布する地域で、現在17基の窯址が確認されている。窯は6世紀から8世紀にかけて操業していたと考えられており、古墳時代後期から古代を通して須恵器生産を行ったことが窺える。

その中で現在最も古いタイプの須恵器が採集されている窯が潮見山南窯址、窯址群の中で唯一本格的な発掘調査が行われたのが駄馬姥ヶ懐1号窯址である。

潮見山南窯址は調査地の南東部250mに位置する窯址で、採集された資料の中には、6世紀後半でも古い特徴をもつ蓋坏があるが、なにぶん採集資料ゆえに論拠に乏しく、今後の本格的な発掘調査の実施が強く望まれる。

駄馬姥ヶ懐1号窯址は、本格調査を実施した唯一の窯址で、7世紀後半に操業したと考えられる窯址を調査している。窯体・灰原ともに遺存状態が良好で、発掘調査の実施により得られた成果は大きい。

その他調査地周辺には、**駄馬姥ヶ懐2号窯址**、**小野谷駄馬窯址**など、7世紀から8世紀に操業していた窯址が多く存在する。



第2図 調査地位置図

第Ⅲ章 試掘調査

1. 試掘調査の経過

地理的状況から判断して、葉佐池は西接する葉佐池古墳の立地する丘陵と東接する潮見山の丘陵間の小谷を堰き止めることによって造られた「ため池」だと考えられる。したがって、池の南側に位置する長大な堤部分は明らかに人工的に盛り上げられたものである可能性が非常に高い。加えて、現在水もれの著しいこの堤を改築することで水難事故が発生しないとも限らない。以上の理由により葉佐池の南堤に対する調査は断念した。

試掘調査は、まず葉佐池内の堤改修予定部分を入念に踏査することから開始した。(第2図)

その結果、頂上部に葉佐池古墳の立地する丘陵の東斜面および、その北側に位置する丘陵の東斜面において数十点におよぶ須恵器片を採集した。また特に、北側の丘陵斜面にて、須恵器と伴に崩落した多くの石材を数箇所を確認し、僅かながら遺存する石組の構造および倒壊状況などより、それらが明確に古墳の石室であると判断できた。

すなわち、長年にわたる池水の浸食作用によって古墳の墳丘が削られ、石室が崩壊した結果、石室の石材及び古墳時代の遺物(須恵器)が露出・散乱しているのであり、したがって当地区に関しては明らかに本格調査が必要であると判断された。

石室確認後、調査は明確に古墳が存在する「北堤改修予定部分」と、明らかに人工的に盛り上げられたと判断される「南堤」の大部分を除く範囲に対して実施した。その主な内容は遺構確認のためのトレンチ調査および、旧地形確認のための精査である。

2. 試掘調査の結果

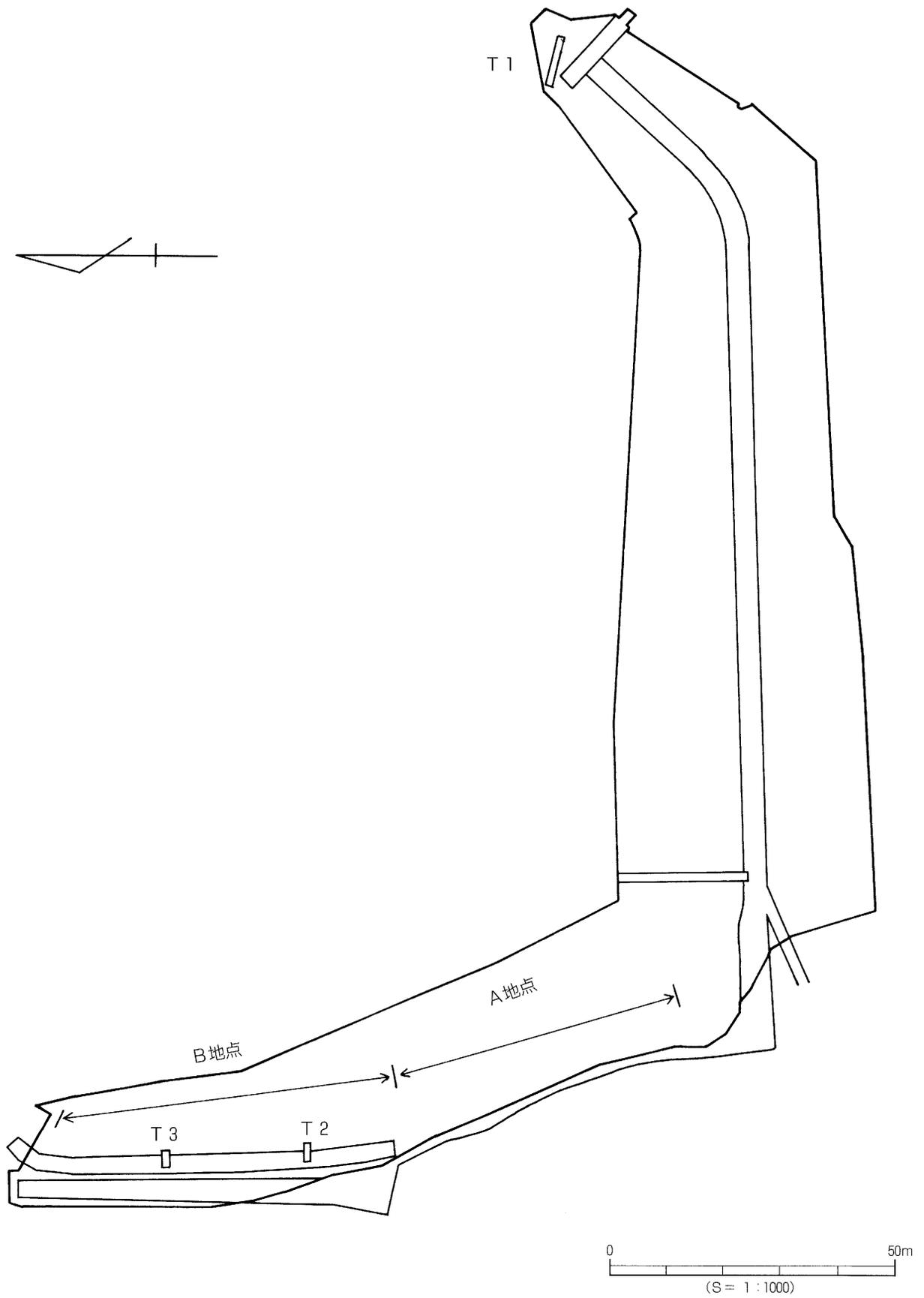
(1) 「西堤・南堤改修」予定部分

前述の通り、南堤本体に対する調査は実施していない。しかしながら、南堤の東端において明らかに自然の岩盤が露出する地点がみられたことから、地山上面の遺構確認を目的としてトレンチを設定し(T1)、内部の精査を実施した。西堤に関してはA地点およびB地点の精査作業を行い、特に精査作業だけでは不十分だと思われる2ヶ所についてトレンチを設定し(T2・T3)、内部の精査を実施した。(第3図・第5図)

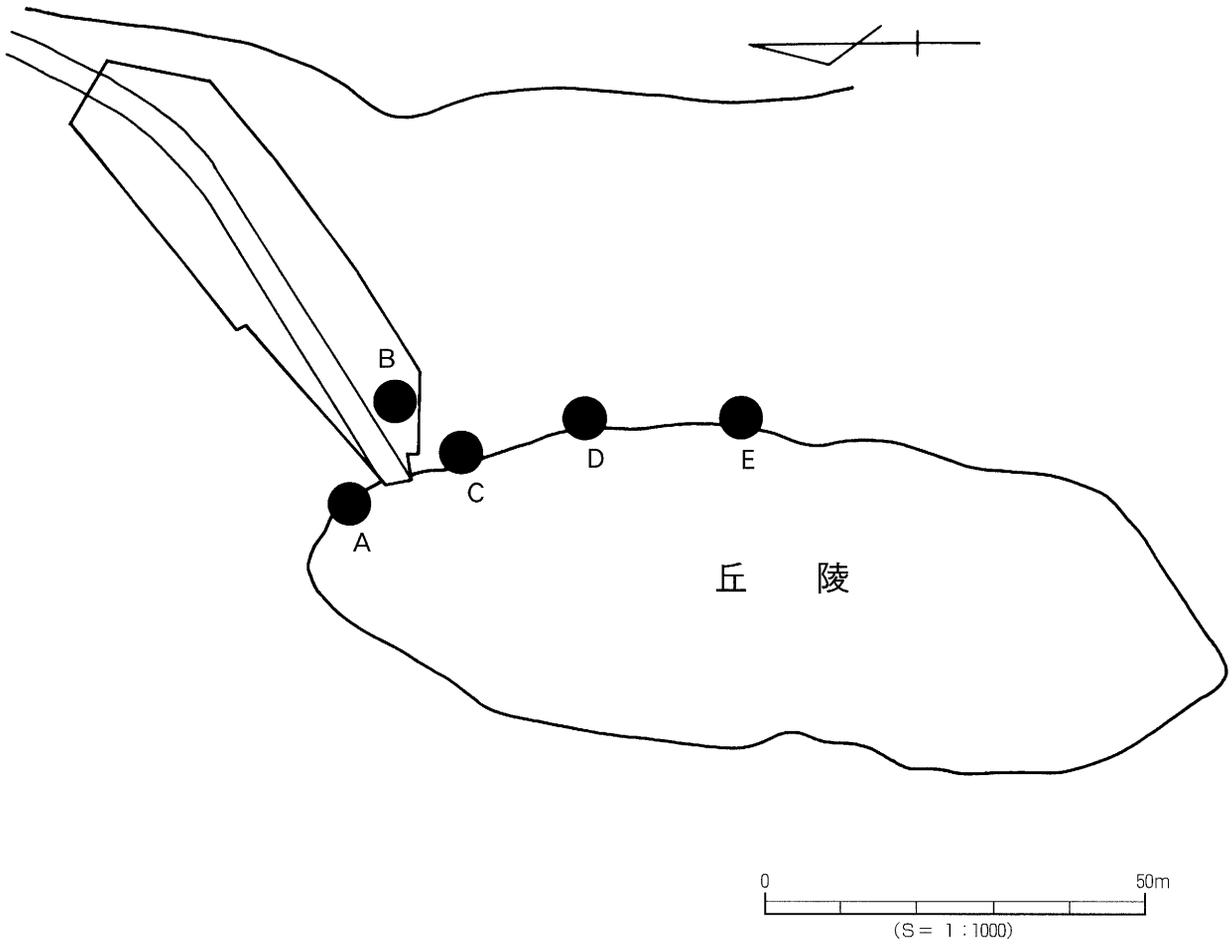
以下に各トレンチおよび各地点の調査結果を記す。

[T1] ……地山上に盛られた近現代の人工的な造成土および池内部における自然堆積を確認したのみで、遺構・遺物ともに確認されなかった。

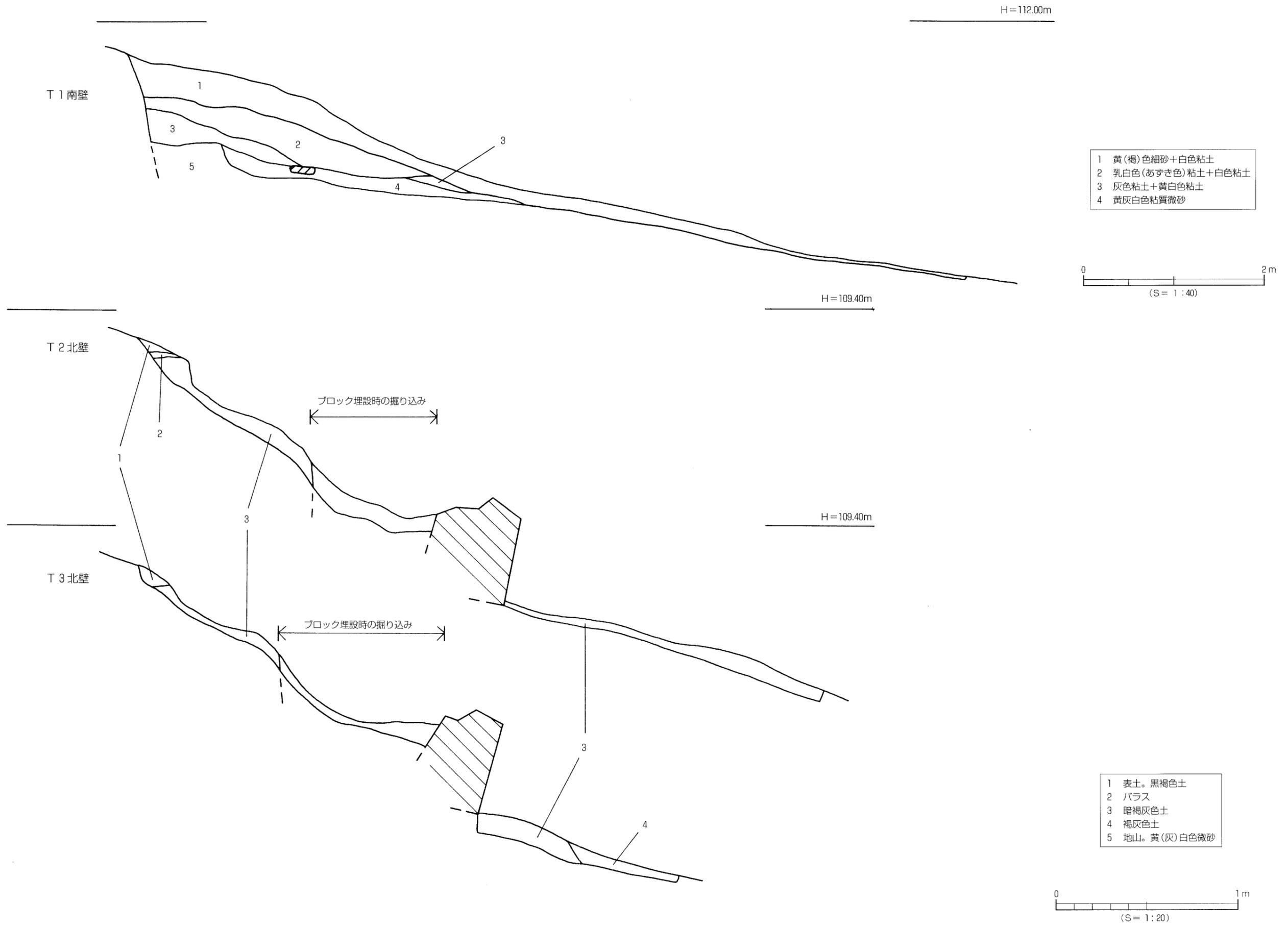
[A地点] ……精査作業によって、上方に位置する葉佐池古墳より流れ落ちたと考えられる数点の須恵器片を採集した。池水の浸食が激しく、葉佐池古墳の墳丘盛土を確認することはできなかったが、丘陵下位を構成する岩盤の検出によって旧地形を確認することができた。すなわち葉佐池古墳の立地する丘陵と、北側に位置する丘陵との間に本来、谷状の窪地が存在したことが分かった。



第3図 「西堤・南堤改修」 予定部分トレンチ位置図



第4図 「北堤改修」 予定部分周辺石室分布図



第5図 試掘調査トレンチ土層断面図

試掘調査

本地点の調査によって、葉佐池構築以前の地形をある程度解明することができたものの、遺構を確認することはできなかった。

〔B地点〕…精査作業によって少量の須恵器片を採集し、遺構の有無を探るべくT2・T3を設定した。後述の通り、各トレンチにおいて遺構は全く検出されておらず、全体に人工的に盛上げられた土手（堤）が築かれていることが判明した。

〔T2〕……人為的に積み重ねられた盛土を確認したが、池の堤に伴うものと判断された。

〔T3〕……T2同様、葉佐池の堤に伴う盛土を確認した。

（2）「北堤改修」予定部分

前述した通り、本地区の周辺には明らかに古墳に伴うものと判断できる石材の集中する地点が5ヶ所（A～E）認められる。そのうち、“石室B・Cと其々の墳丘”、“石室Dに伴う墳丘の一部”が改修工事によって破壊される可能性が高い。（第4図）

（3）小 結

「西堤・南堤改修」予定部分については遺構の存在は全く認められなかった。しかしながら、「北堤改修」予定部分に関しては、明らかに古墳の石室と判断できる石組みを確認し、ため池の改修工事によって破壊される可能性の高い3つの古墳（古墳B・C・D）に関して発掘調査が必要であると考えられる。

以上、試掘調査の結果、「西堤・南堤改修」予定部分については遺構の存在は全く認められなかった。しかしながら、申請地の北側（「北堤改修」予定部分）において、明らかに古墳の石室と思われる石組及びそれに伴う古墳時代の遺物（須恵器）を確認し、ため池の改修工事によって破壊される可能性の高い3基の古墳を中心に本格調査を実施する運びとなる。

第Ⅳ章 本格調査

1. 本格調査の経過

調査はまず、ほぼ全壊状態である石室の遺存状況把握のために、石室の現状を記録する作業から開始した。記録作業は、写真撮影および測量による図面作成によって行い、主に石室周辺に散乱した石材の状況や石室周辺の地形などを記録した。(第6図・第8図・第10図)

続いて、古墳築造当初の場所から大きく移動していると考えられる石材を除去し、わずかながら遺存するピュアな部分の検出作業をおこなった。

この作業の結果、調査区の北側に位置する石室(試掘調査B石室=潮見山古墳15号墳主体部)は奥壁の床面付近を遺存した状態であること、南側に位置する石室(試掘調査C石室=潮見山古墳16号墳主体部)は石室の左側壁部分を遺存した状態であることが判明した。

その後、古墳主体部(石室)の調査及び墳丘の調査を併行して実施し、石室および墳丘の構造や葉佐池の土砂が堆積する以前の地山の状況を図面に記録、写真撮影をすることで発掘調査を終了し、さらに、大規模に掘削をおこなった部分を埋め戻すことで現場作業を完了した。(第7図・第9図・第11図)

2. 本格調査の結果

(1) 墳丘の調査

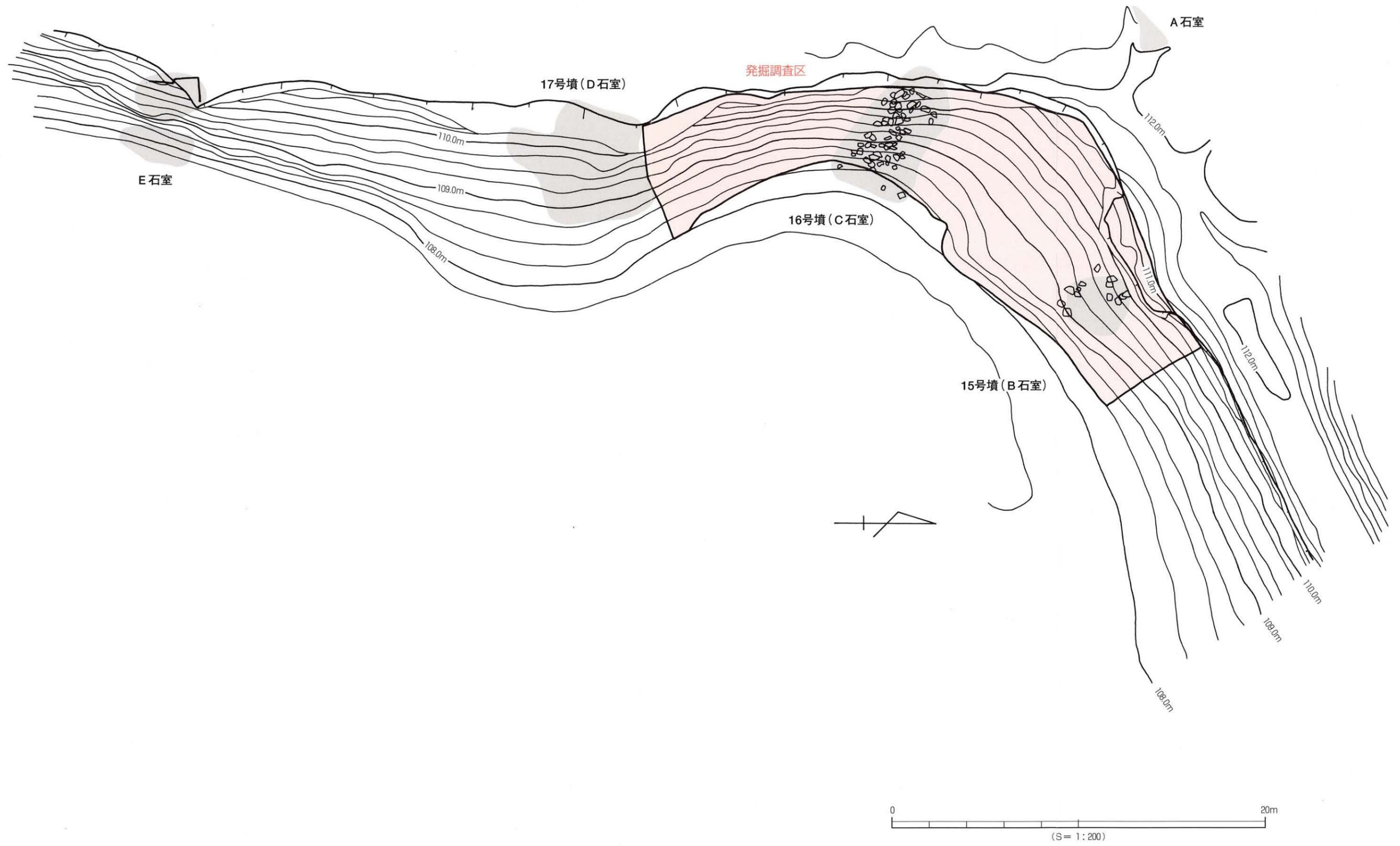
本格調査で対象となった石室は合計2基、古墳(墳丘)の数は3(2)基である。

調査区の北西から西に位置する壁面土層(第7図A B断面)の観察によって、16号墳の墳丘および、それに伴う周溝を確認し、16号墳の南側に位置する17号墳(試掘調査=D石室)の墳丘及び周溝を確認した。

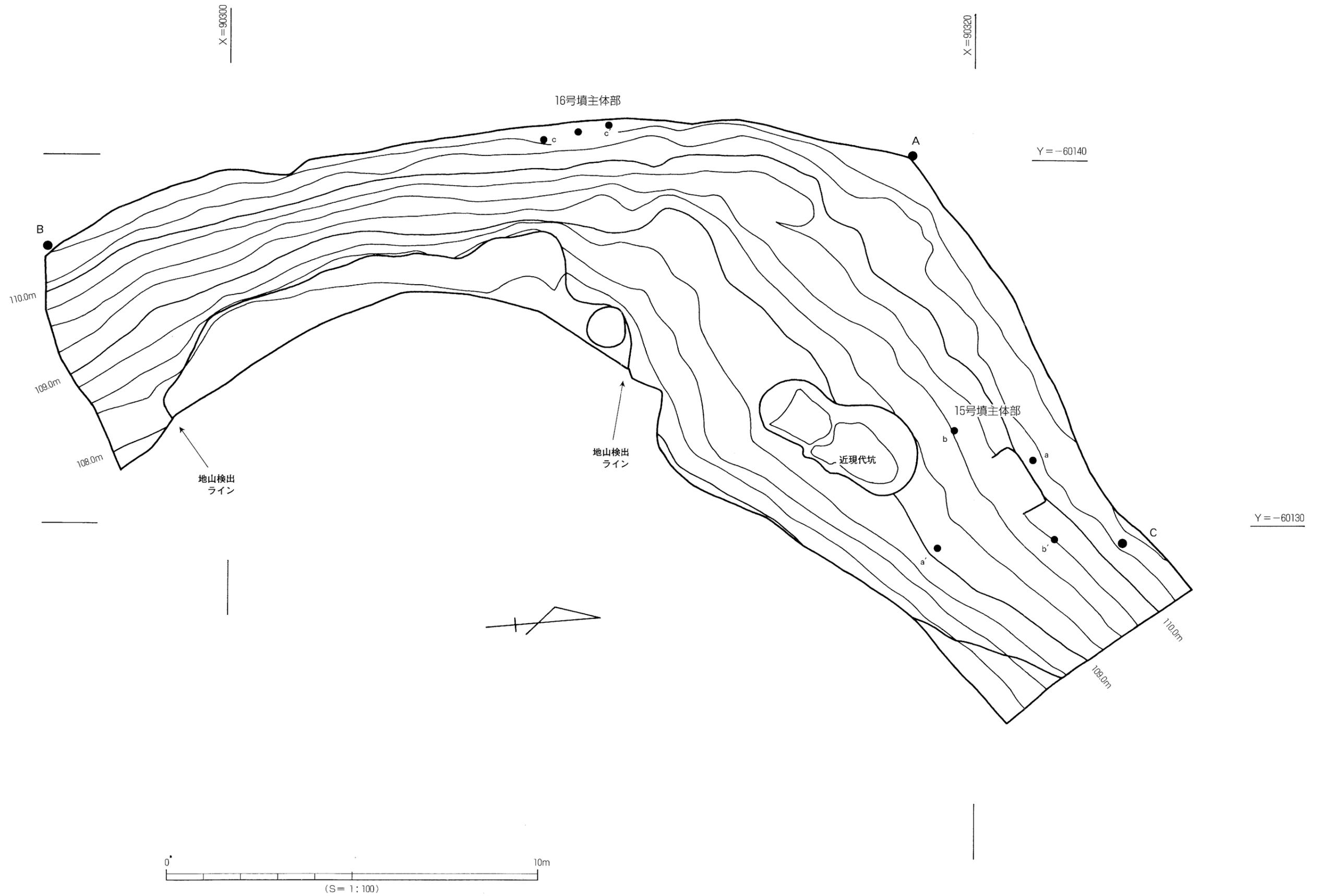
調査の結果、現存する16号墳の周溝埋土は黒色微粒土、17号墳の周溝埋土は上層が黒灰色微粒土、下層が黒色微粒土で構成される。周溝の平面形状については、調査区の制限上、確認することができなかった。15号墳に関しては、墳丘および周溝の状態について全く確認できていない。(第12図)

以下、調査結果を列記する。

- ① 16号墳及び17号墳それぞれの古墳に伴う周溝は、石室の前面には廻らないことを確認した。そのことより、周溝は古墳を全周するものではなく、墳丘の背後に馬蹄形状に廻るタイプであった可能性が高い。
- ② 古墳の形(墳形)に関しては、証拠に乏しく断定することができない。
- ③ 17号墳の周溝内部に埋土が堆積した後、その上に16号墳の墳丘盛土が積み上げられていることから、17号墳築造後しばらくして後に16号墳が造られたと考えられる。
- ④ 15号墳に関しては、墳丘が全く遺存しておらず、周溝(馬蹄形溝)の有無および墳形など墳丘構造全般について全く不明である。
- ⑤ 墳丘を確認できた16号墳・17号墳に関して言えば、墳丘の盛土は調査地周辺で容易に得られる地山の土砂を利用していることが窺える。また、硬質で粘性の強い土砂ばかりではなく、非常にもろい土砂の使用も認められる。土砂の色調は乳(黄)白色～橙色～褐色系統を呈する。

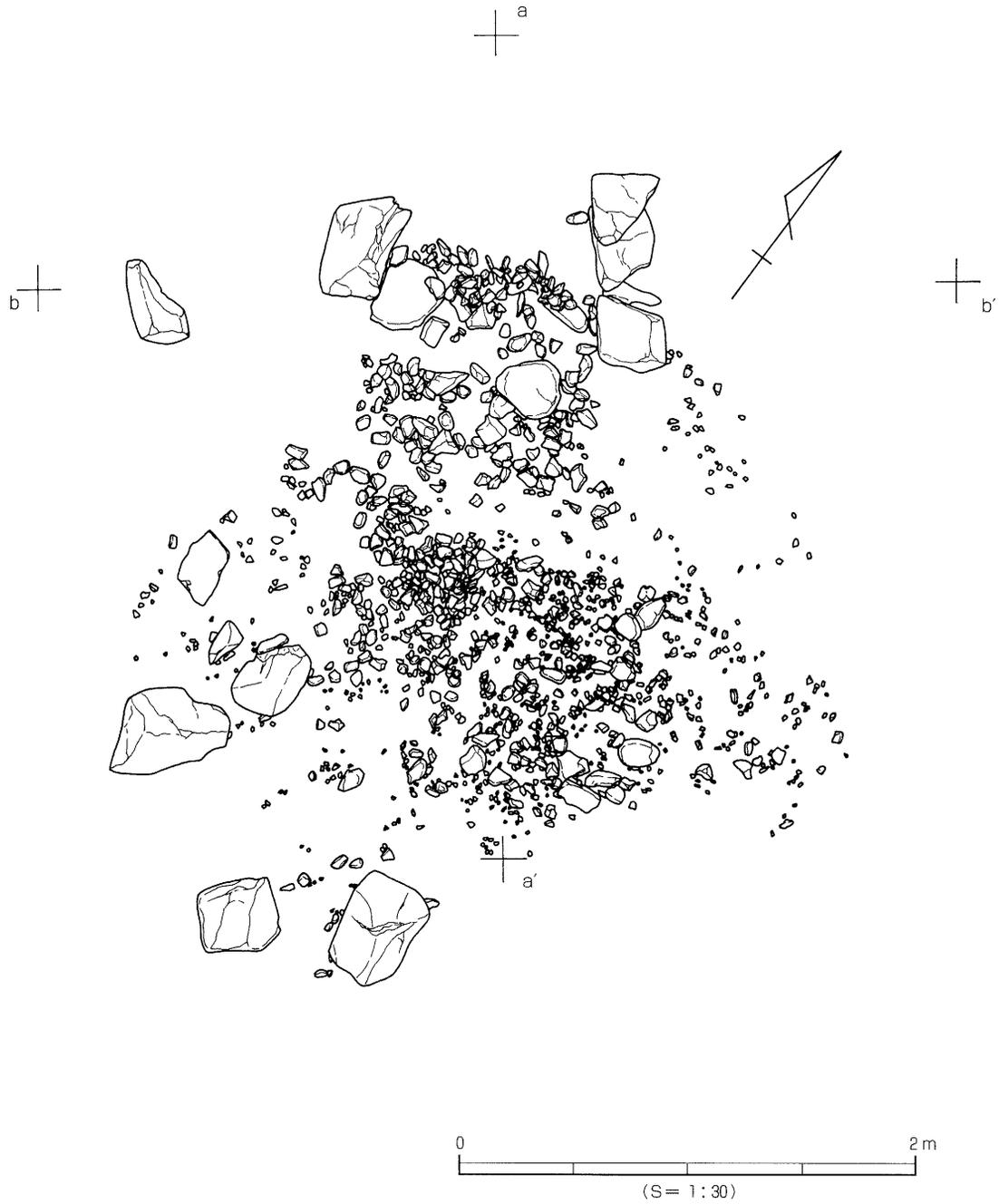


第6図 調査前地形測量図



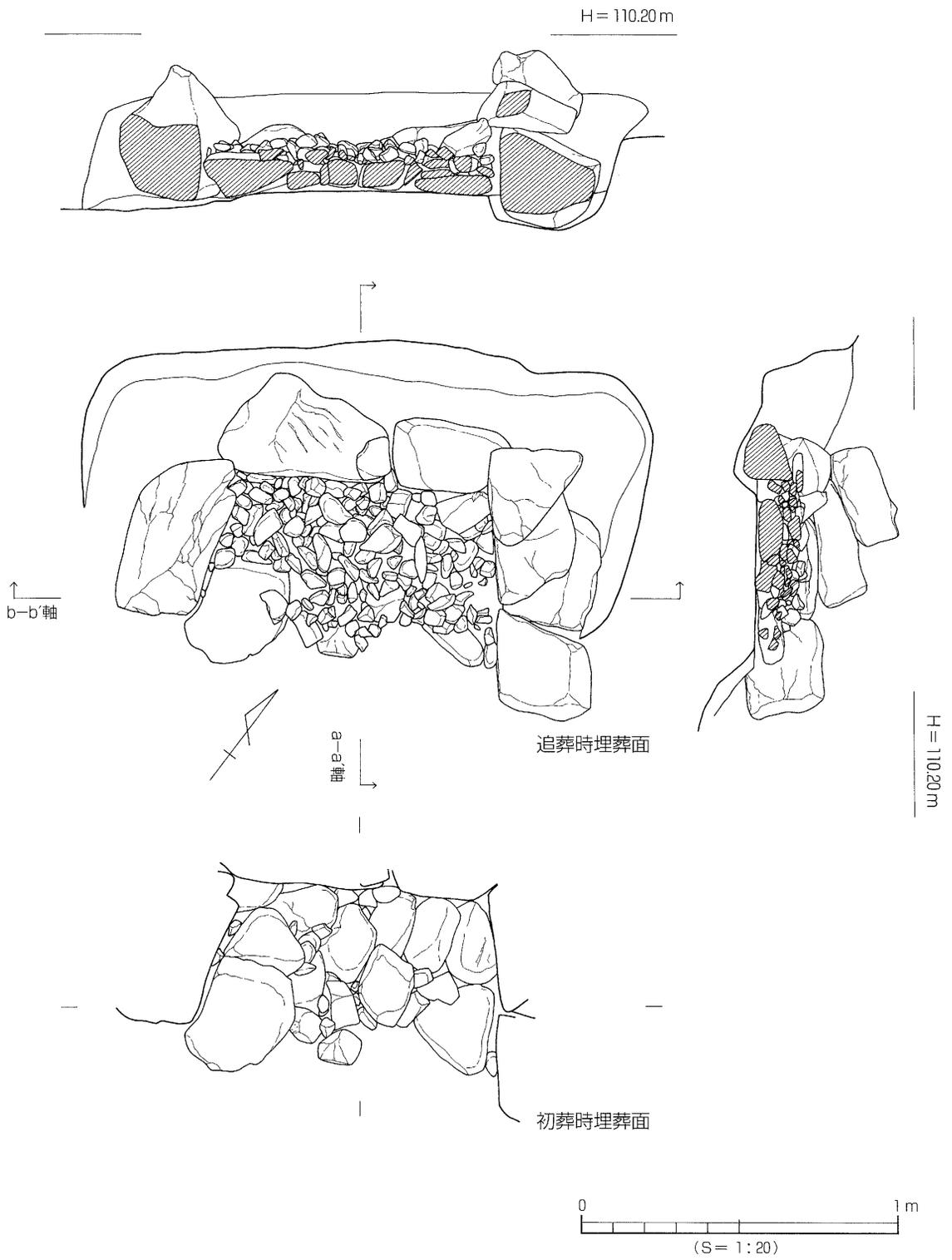
第7図 調査後地形測量図

本 格 調 査

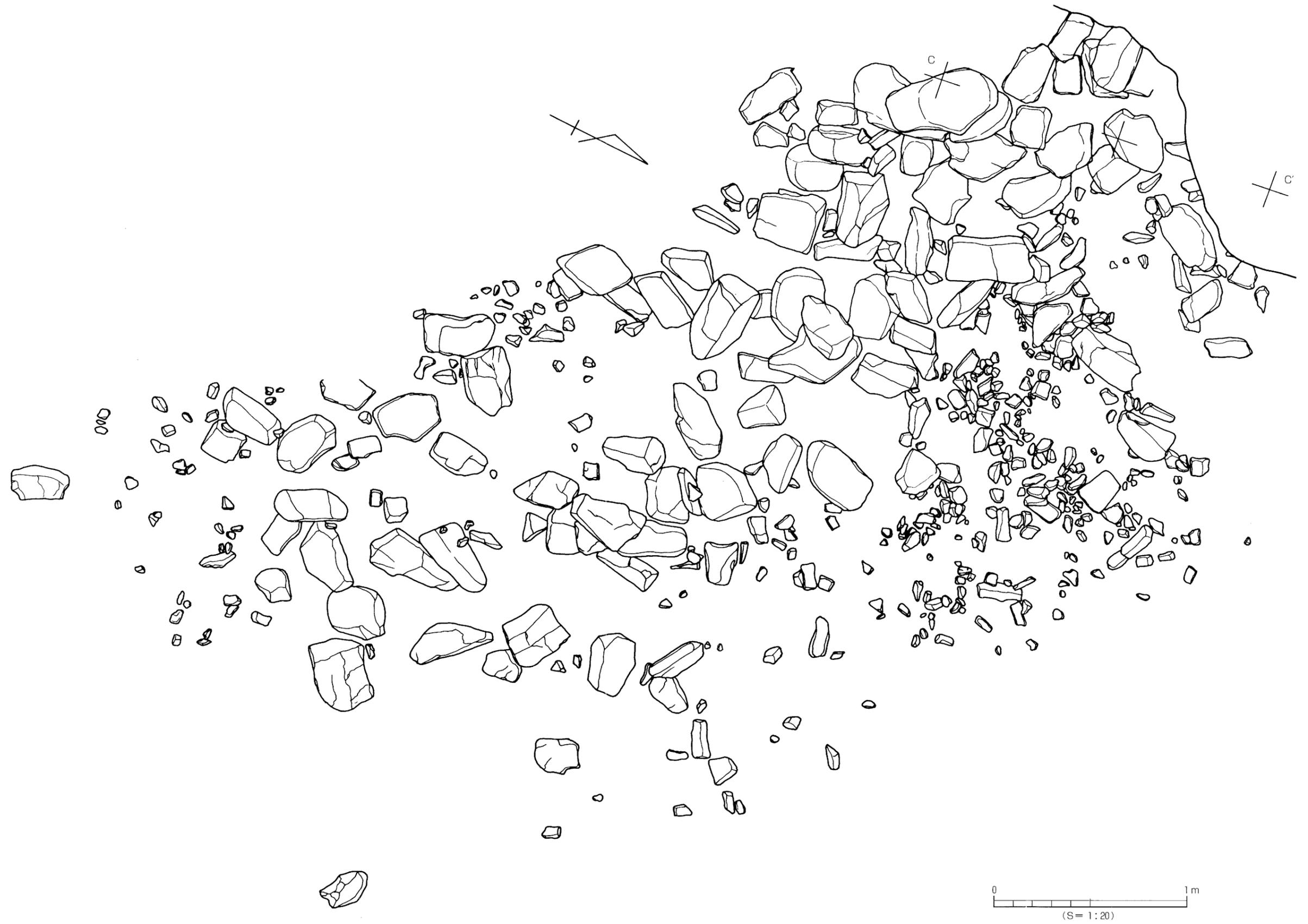


第 8 図 調査前 15 号墳主体部測量図

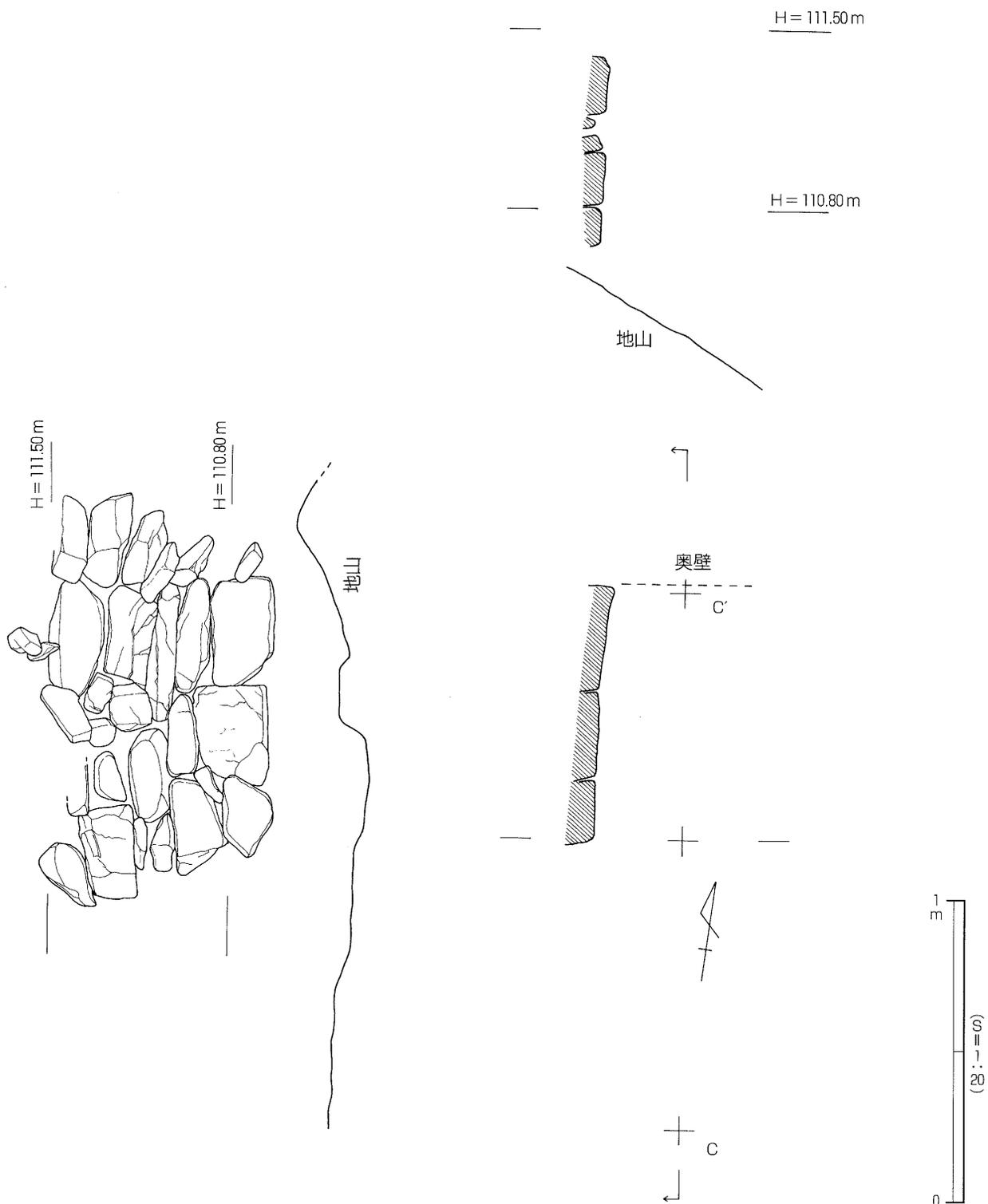
本 格 調 査



第 9 図 15号墳主体部測量図



第10図 調査前16号墳主体部測量図



第 11 図 16号墳主体部測量図

(2) 石室の調査

① 15号墳主体部 (第8図・第9図)

15号墳主体部は、試掘調査時にB石室と呼称していた石室のことである。

今回調査を実施した3基の古墳のうち最も北側に位置する石室で、試掘調査段階より石室の床面が露出しており、調査当初より古墳の石室として認知されていた。

石室は南東方向に開口する横穴式石室である。地山面を削り込んで石室よりもひと回り大きな墓壇を設け、その内側に30～60センチほどの若干扁平な石材を積み上げて石室を構築している。石材は調査地至近を流れる小野川周辺で容易に得られる石材で、角が少し丸みを帯びている。

羨道および玄室の大半は失われており、現在は玄室の奥壁周辺部のみが遺存する。そのため、玄室の平面プランは不詳であるが、奥壁から中央部に向かって徐々に広がることより判断して、胴の張る長方形を呈する可能性が高い。

玄室の床面には二重に石材が敷き詰められており、このことより少なくとも2度の埋葬が行われたと考えることができる。すなわち、初葬時に下位の「拳～人頭大の扁平な石材を敷き詰めた」床面を利用し、追葬時に石室の整理をおこなった際、「5～10cm程の玉砂利」を上部に敷きなおして埋葬をおこなったと考えることが可能である。

石室内部からの出土遺物は皆無に等しく、鉄鏃の一部と思われる鉄器を含め、数点の鉄器片があるのみである。また、石室の周辺から多くの須恵器片を採集しているが、それら全部が葉佐池の内部に堆積した土砂からの出土であるため、それらが当古墳に直接伴う遺物かどうか判断できない。

② 16号墳主体部 (第10図・第11図)

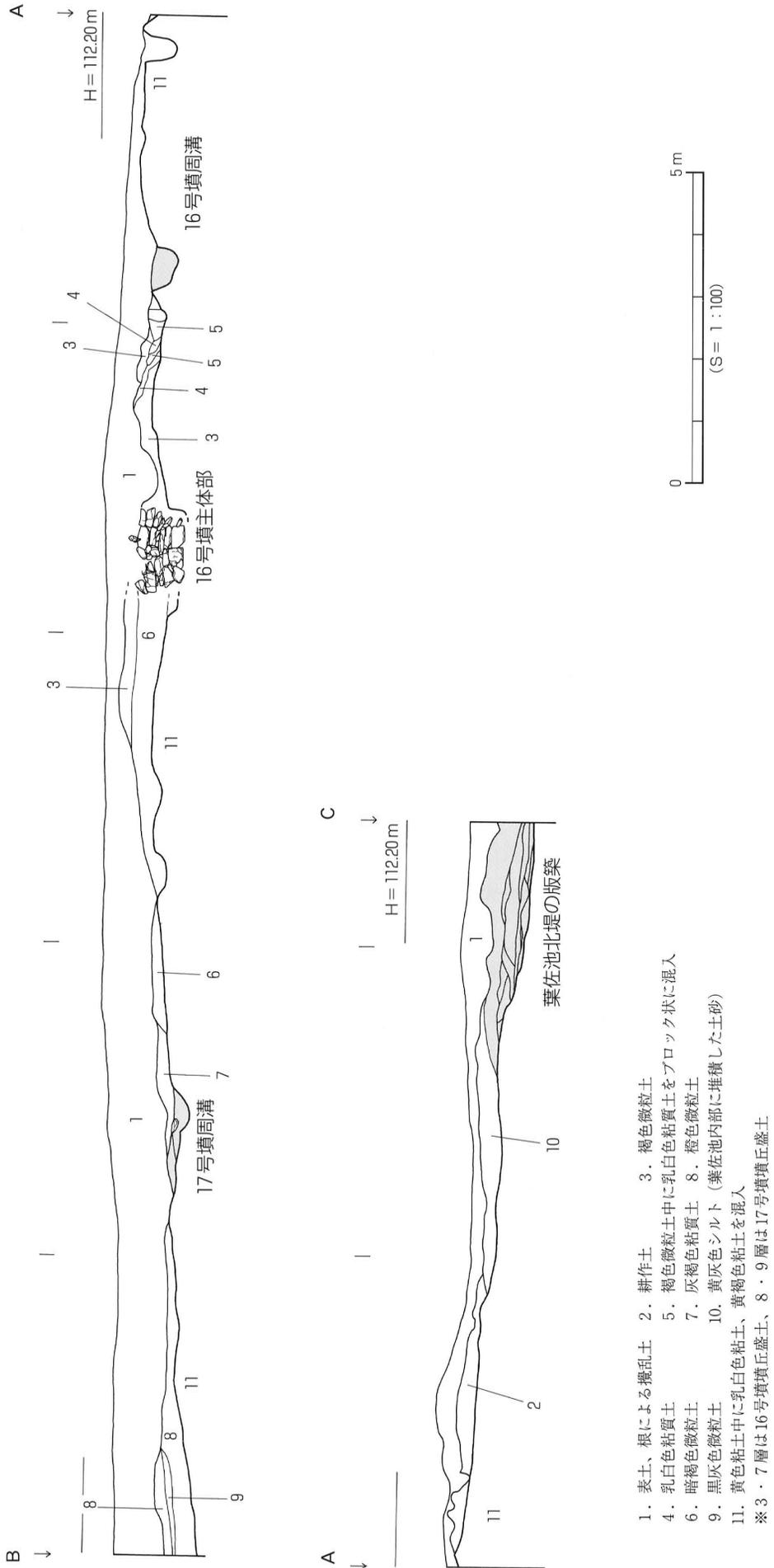
試掘調査時にC石室と呼んでいた石室で、前述した15号墳主体部の南西側に位置する。

南～南南東に開口する横穴式石室で、羨道および玄室の大部分が崩落した状況であった。しかしながら幸いにも樹の根に守られる形で、玄室左側壁の一部および、左側壁から奥壁に繋がるコーナー部分が辛うじて遺存していた。残存する部分が非常に偏っているため、石室の平面プランは不明である。

玄室部左側壁は、それ自体としては遺存状態が比較的良好だといえる。遺存部位に限って言えば、側壁の“持ち送り”はほとんど確認できず、角が若干丸みを帯びた石の平らな面を揃えながら、ほぼ垂直に4～5段積み上げる状況を確認した。15号墳同様、石室に用いる石材は調査地至近を流れる小野川周辺で容易に得られる石材である。

特に図化しなかったが、調査段階において、原位置を離れ崩落の可能性が高いと判断した為、除去した石の中に奥壁の最下段に使用していたであろう石を確認している。幅50cm、高さ40cm、厚さ35cmほどを測る角の丸い角礫で、側壁に使用している石と比べると、ひと回り以上大きいものであった。当石室の奥壁構造を特徴付けることのできる情報の一つであると考えられる。

床面が全く遺存しないため、石室からの出土遺物はみられなかった。15号墳同様、石室周辺の土砂中より多くの須恵器片を採集しているが、それらが本当に16号墳に伴うものなのか確証を得ることができない。



第12図 調査区壁面土層断面測量図

第V章 出土遺物

今回の調査によって得られた遺物の中には、縄文時代から近・現代に至るものまで様々あるが、その中でも特に、潮見山古墳群と関係の深い時代の遺物に限って掲載する。(第13図)

第13図1～3は、15号墳周辺(葉佐池内)に堆積する土砂中より出土した須恵器である。1は壺あるいは瓶の口縁部～頸部片で、部位全体の約5分の4を欠損する。焼成は良好、色調は灰白色を呈し、外面に一部暗オリーブ灰色の自然釉が付着する。口縁端部が緩やかに内湾し、外面に二条の凹線を施す。2・3は明確な肩部を有し、口縁部が短く直立する短頸壺である。いずれの個体も肩部外面に二条あるいは一条の凹線をめぐらせ、胴部下半から底部にかけて外面に回転ヘラケズリが施される。焼成は良好、色調は灰白色～青灰色～オリーブ灰色を呈する。2は全体の約10分の1、3は全体の約2分の1を遺存する個体である。

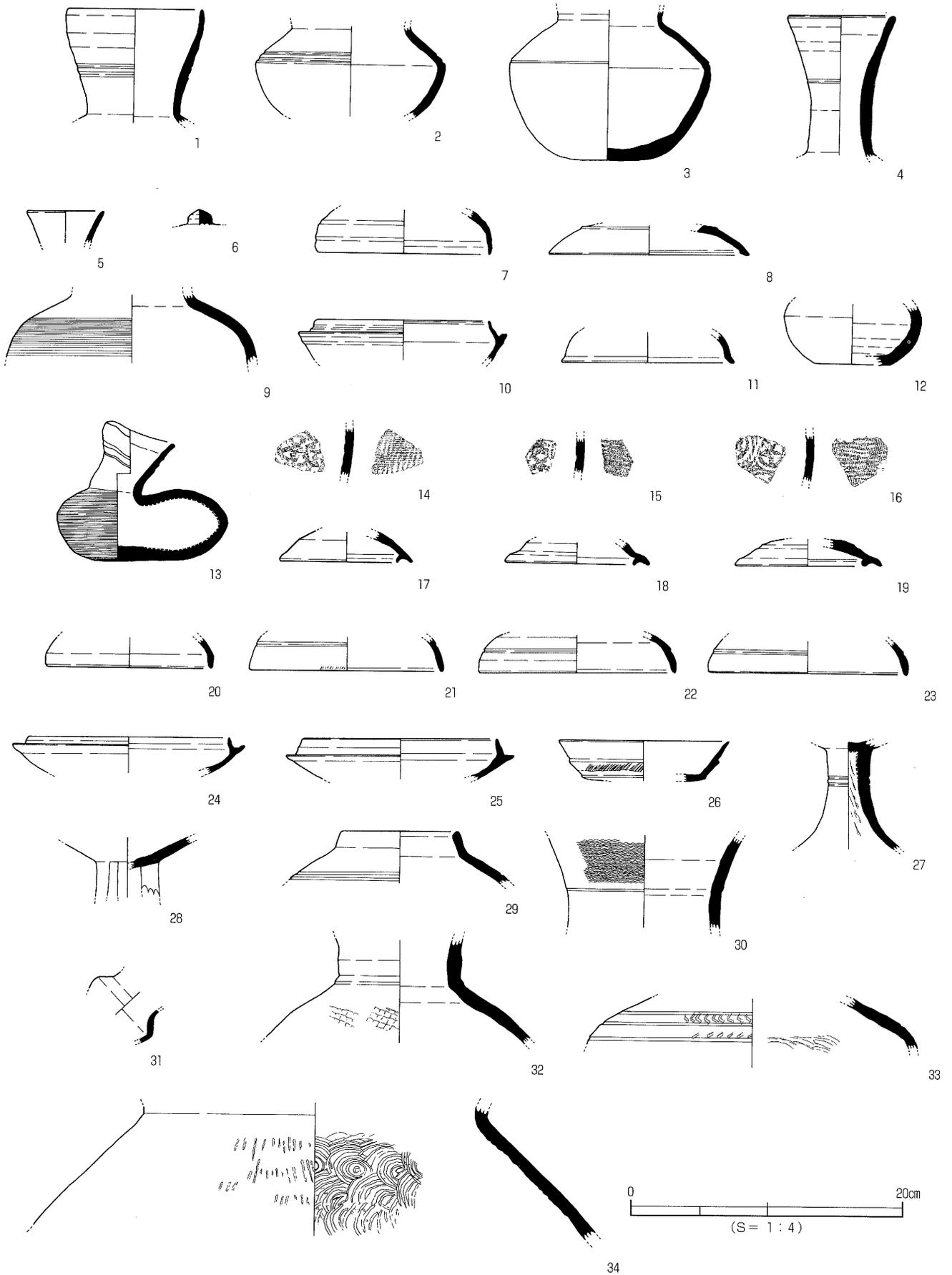
7・9は16号墳墳丘盛土の上部に堆積する土層内(調査区壁面中)より出土したもの、4～6及び8・10は16号墳周辺(葉佐池内)に堆積する土砂中より出土した須恵器である。4は長頸壺の口縁部で、中位に一条の凹線を施す。焼成良好で堅固、灰白色を呈し内外面にオリーブ灰色の自然釉が付着する。5は瓶の口縁部で、部位の約2分の1を欠損する。色調は、内面：青灰色、外面：暗青灰色を呈する。6・7・10は蓋坏である。6は宝珠形つまみで灰白色を呈し、一部自然釉の付着によりオリーブ灰色を呈する。7は坏蓋で全体の約10分の9を欠損、端部内面に緩やかな段を有する個体である。端部外面に平行した数条の擦痕が認められ、色調は外面：灰～青灰色、内面：青灰色、断面：灰赤色を呈する。10は立上がりの端部が袋状に湾曲する坏身で、3×5cmほどの小片である。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色～青灰色を呈する。8は端部に面をもつ器台の脚部片で、残存部位最上部に長方形のスカシを有する。4×2cmほどを測る小片で、色調は内外面ともに灰白色、断面：灰赤色を呈する。9は壺で、外面に粗いカキメ調整を施す。10×5cmほどを測る破片資料で、色調は外面：灰色、内面：灰白色、断面：灰赤色を呈する。

11・12及び14～16は、17号墳周辺において採集した須恵器である。11は、3×2cm程しか残存しない蓋坏の破片資料で、内外面ともに灰白色を呈する。内外面に暗オリーブ灰色の自然釉の付着が見られることより坏身の可能性を残す。12は甕の胴部で、7×3cmほどの破片資料である。胴部中位に一条の凹線が認められ、胴部下位から底部まで回転ヘラケズリ調整が施される。内外面ともに灰白色を呈し、一部外面に暗オリーブ灰色の自然釉が付着する。14～16は粗い平行タタキを施した後、その上からタタキと直交した方向に、板状工具によるきめの細かいハケ目様の調整が施される甕である。いずれも胴部片で、内面に十字の当て具痕がみられる。色調は灰白色～灰色を呈し、焼成はやや甘い。

13は、試掘調査以前の踏査でE石室内部より採集した平瓶である。口縁の一部を欠損するのみで、焼け歪みのある口縁部中位に二状の凹線をめぐらせる。底部を含む体部の全面に、細かなカキメ調整を施す優品で、色調は内面が灰色、外面が灰色～暗灰色を呈する。

17～34は、本格調査実施部分あるいはその周辺にて表面採集した須恵器である。17～23は坏蓋で、いずれも全体の10分の1に満たない破片資料である。17～19は口縁部にかえりのあるタイプで、頂部に宝珠形つまみがつくと考えられる。20～23は口縁部にかえりの無いタイプで、21及び22は肩部

出土遺物



第13图 出土遺物実測図

に凹線状の形骸化した段を有するほか、口縁端部内面に沈線状の段を有する。23は肩部に形骸化した段のみを有する個体である。いずれの個体に関しても、色調は灰色～灰白色を呈し、焼成は良好である。24・25は坏身で、立上がり部内面の段は一切認められない。24の色調は内外面：灰白色、断面：灰赤～灰色を呈し、25の色調は内外面：灰色、内面：灰赤色を呈する。両者ともに4×4cmほどの小片で、焼成は良好である。26・27は無蓋高坏、28は有蓋高坏である。いずれも長い脚部が付属するタイプで、一部自然釉の付着により暗オリーブ灰色を呈するが、基本的には灰白色～灰色を呈する。26は二つの小片を合成復元したもので、二つの段で区画された外面中位にクシ状工具によって連続した沈線文を施す。28は長方形状のスカシが二段に穿たれていたと考えられ、少なくとも上段には三方向に施されている。29～34は壺及び甕で、29は短頸壺、31は子持壺の小壺、33は長頸壺である。29の肩部には二状の凹線がめぐり、30の外面には細かなクシガキ波状文、32の外面には目の粗い格子目タタキ、33の肩部には三条の凹線で区画した間に台形と三角を組み合わせた文様のスタンプが連続して施されている。色調は32の外面及び断面、30・33・34の断面が灰赤色を呈する以外は、基本的に灰白～灰色を呈しているが、30の外面及び31の内外面は暗青灰色である。

第Ⅵ章 調査の成果と課題

今回の調査によって、古墳時代後期末～終末期に属すると考えられる古墳を3基検出し、古墳の埋葬施設として2基の横穴式石室を検出することができた。特に、潮見山古墳群の至近には、6世紀中頃の前方後円墳として知られる葉佐池古墳が存在するが、現在まで前後の動態について不明なところが多かった。今回、やや時期を隔ててはいるものの、葉佐池古墳に後続する時期の古墳群を調査することができ、その一様相が判明したことは大きな成果であった。

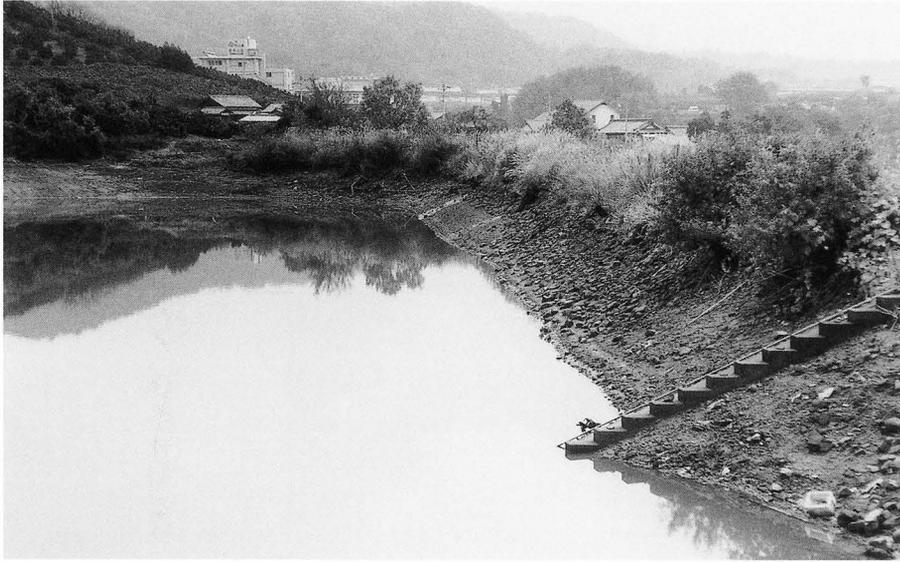
今回調査を実施した古墳は、墳丘及び内部構造のいずれに関しても、遺存状況が決して良好だと言えるものではなく、出土遺物に関しても、ほとんど全てが原位置の不明瞭な資料であった。

しかしながら、調査によって得られた遺物の大部分が潮見山古墳群となんらかの関係をもつものであることは確実であり、したがって、それらを参考に古墳群全体の存続期間を推定することは可能である。すなわち、出土した資料から判断すると、潮見山古墳群は少なくとも6世紀末～7世紀前半にかけて埋葬行為が行われた古墳群であると推定することが可能である。

ここで、推定された潮見山古墳群の存続期間と調査区周辺に分布する松山平野東部古窯址群の操業時期とがほぼ重なることは注目され、窯址出土資料と潮見山古墳群出土資料との間にどのような関係があるのかを解明することが今後の課題である。今回出土した遺物の中に、同心円の中央部に十字の当て具痕をもつ甕の破片（第13図14～16）があるが、同様の当て具痕を有する甕が小野谷駄馬窯址採集資料の中に含まれている事実は重要で（図版8に掲載）、それが「生産と消費」の関係を示すのか、「生産と生産者の墓」の関係を示すのか、あるいは何ら関係の無い事象であるのかなど、今後の調査によって解明していかなければならない。

6世紀に前方後円墳が出現し、6世紀後半～8世紀にかけて須恵器の窯を操業する小野地域のなかにあつて、潮見山古墳群はどのような役割を担った階層の人々の墓だったのであろうか。

写真図版



試掘調査前・南堤改
修予定部分(西より)



試掘調査前・A～B
地点(南東より)



試掘T1完掘状況
(北西より)



試掘A地点精査状況
(南東より)



試掘B地点精査状況
(南東より)



試掘T2完掘状況
(西より)



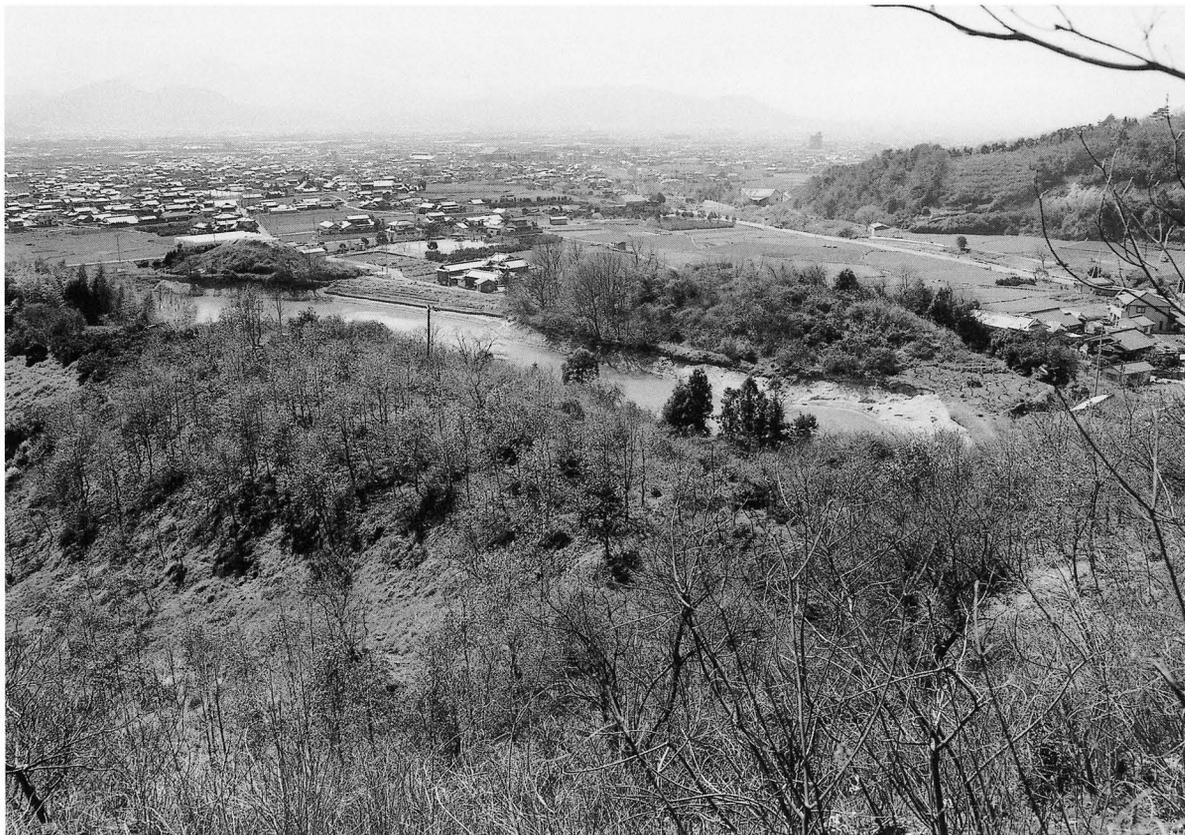
試掘T3完掘状況
(西より)



15号墳主体部本格調査前
(南より)



16号墳主体部本格調査前
(東より)



調査地遠景（北東より）



調査地全景（北より）



調査地完掘状況（東より）



17号墳調査後現況（北より）



15号墳主体部追葬時埋葬面（東より）



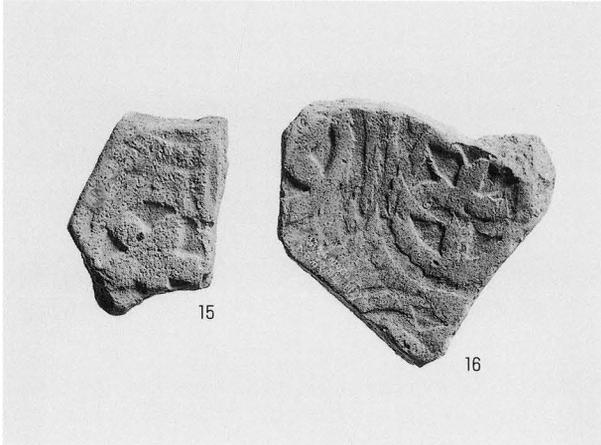
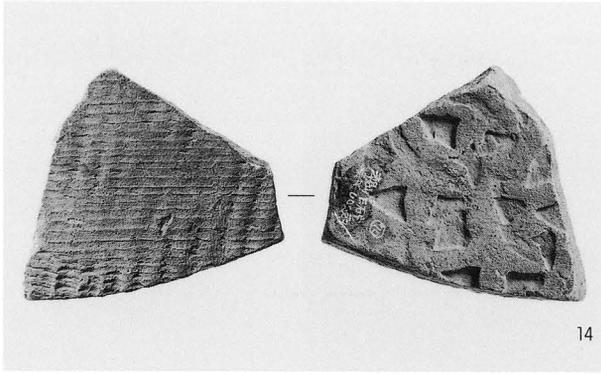
15号墳主体部初葬時埋葬面（南より）



16号墳検出状況（北東より）



16号墳主体部完掘状況（東より）



調査地出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しおみやまこふんぐん							
書名	潮見山古墳群							
副書名	ため池等整備事業 葉佐地区に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第90集							
編著者名	吉岡 和哉							
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	市教委：〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 埋文：〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL 089-923-6363							
発行年月日	西暦2003年3月7日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しおみやまこふんぐん 潮見山古墳群 15・16・17号墳	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 きたうめもたち 北梅本町	38201		33° 48' 46"	132° 51' 01"	20020119～ 20020511	530	ため池改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
潮見山古墳群 15・16・17号墳	古墳	古墳	墳丘 横穴式石室	須恵器（蓋坏・高坏・甕・壺・平瓶・子持壺）		内面に十字の当て具痕を有する甕		

松山市文化財調査報告書 第90集

潮見山古墳群

—ため池等整備事業 葉佐地区に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成15年3月7日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1
TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 松山市湊町7丁目1-8
TEL (089) 941-9111
